

てこな・ミュージック・ジャーナル

ショパン生誕200年
第4回 ~絵に描かれたショパン~

最終回は画像でショパンが生きた世界をお話しましょう。



上の絵には、当時の著名な芸術家、思想家が描かれています。描いたのは画家のシャルパンティエと女流作家のジョルジュ・サンド。2人とも19世紀、フランスを代表する芸術家ですが、仲間たちをユーモラスな集団肖像画としました。舞台はサンドの館があるフランス中部ベリー地方のノアン村です。肥沃な農村地帯、羊の群が牧草地に見えます。

もう少し近寄ってみましょう。

中心に何人描かれているでしょうか。3人?いえ4人です。帽子をかぶり左手に葉巻を持っている女性はジョルジュ・サンドです。画面のすべての人を取り仕切っているかのような様子ですね。中心の左には情熱的に何かを語っているかのような金髪の男性、大演奏家フランツ・リストです。そして腕組をして2人を眺めているのがロマン派画壇の巨匠ウジェーヌ・ドラクロアです。さてもう一人はサンドの膝の上にいるのがお分かりでしょうか。ショパンです。極楽鳥のような色のショパン。



市川市文化振興財団 音楽総合プロデューサー 小坂 裕子

リストは夢見るように新作のコンチェルトについて語り、ショパンは体調が悪いのでしょうか、顔色悪く、サンドはそんなショパンを大事そうに抱えています。

扇絵の左川岸には、サンドが溺愛するモーリスが背中に羽のある天使の姿で、右側にはサンドと終生うまくいかなかった娘のソランジュがライオンの姿で描かれています。ショパンがサンドと別れることになったのはソランジュの身勝手な結婚です。強情で賢沢。娘が金色のライオンに見えたのでしょうか。そんなライオンをどうにか「調教」しようとするかのように、両足を揃えさせています。

1838年から8年間、サンドの保護を受けて暮らし、そのおかげで「前奏曲集」「英雄ポロネーズ」など数多くの作品を世に送ることができたショパンの日々が、ここには描かれているかのようです。文学者でなければ、画家になりたいと考えるほどの画才もあったサンドですから、その洞察力には驚くべきものがあります。母のようなサンド、その姿を象徴するかのような説得力のある構図だとは思いませんか?

さてそのように観察眼のあるサンドですから、もう一枚ご紹介しましょう。

サンドが描いたショパン像です。神経質そうな様子、創造の大変さが伺えます。

ショパンはサンドに連れられて、夏はノアンの館で、まさに「健康的」な生活を7回、そして寒くなると一緒にパリに帰りました。「母」サンドに手厚く世話された生活は1847年冬まで続きましたが、サンドから別れを告げられたのち、創造の意欲も体力もすっかり無くし、2年後に待ち受ける死への歩みとなりました。



~ショパン講座へのご案内~

7月7日(水)、14日(水)市川市市民会館にて行います。
詳しくは表面をご覧ください。

過去のてこな・ミュージック・ジャーナルはHP「てこなどっと ねっと」<http://www.tekona.net/>でご覧になれます。